

---

# 千なる彼方が六の鬼

上木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千なる彼方が六の鬼

### 【Nコード】

N4184Y

### 【作者名】

上木

### 【あらすじ】

地形や積み重ねた歴史が様々な怪異を呼ぶ街 江甲。驟雨の最中、休憩のために入った使われていないバス停で、刑部不比等は奇妙な少女と出会った。

その後も、探しても狙ってもいないというのに偶然の遭遇を繰り返す二人は、いつの間にか互いに、特別な何かを見出していた。狂風が舞い、狂犬が嗥う。江甲に引き込まれる怪異を狩るために二人は手を組み、仕事を共にする決意を固めた。

## 雷鳴と共に

驟雨に見舞われた。

景色は熱気と雨粒によって薄白み、舗装されていない畦道が跳梁しているような錯覚を抱く。土が弾けているのだ。

スニーカー全体とチノパンの裾が泥だらけだった。ついさっきまで晴れ渡っていたから、傘も持つて来ていない。降り掛かってくる雫を一身に受けながら歩き続けた。

視界に広がるのは田園と雑木林。アスファルトもコンクリートも見受けられないこの景色は、些か時代の感覚を狂わせた。

夏の雨だな、と不比等は思った。全身は雨に濡れているが、寒くはないのだ。むしろ涼しいくらいで、汗を全て洗い流していった。

自分以外に人影など見当たるはずもない。曇天の下で、不比等は孤立している。

雨音が鼓膜を打ち続ける。それ意外には何も聞えず、視界も朧げだった。

ここまで雨に降られてしまっただろう足掻いたところで何も変わりはない。不比等<sup>ふひと</sup>は、投げやりな気分になっていた。傘を持っていない事を悔やむ気も失せている。

畦道を抜けて、少し広い道に出る。景色は相変わらずだ。車が通る事もあるらしく砂利道は真中が盛り上がり、削られている部分には水が溜まっていた。泥水を見るなどいつ以来だろうか、としばし考える。

霧がかかったような景色に不比等は視界を巡らせながら、右手に見える雑木林に足を向けた。確かあちらには古いバス停があったはずだ。

何かに化かされてでもしたらこういふ気分なのだろうか。雑木林と田園以外には何もなく、夕立のおかげで視界は悪い。自分の住まう世界とは別な場所に迷い込んだ気さえしてくる。

華々しさはない、むしろ寂びている。しかし、不比等にはその景色が美しいと思えた。雨は激しく音を立てているというのに、不比等は大きな静謐に包まれているのだ。

不意に、異物が飛び込んで来た。田園も同じではあるのだが、人工物だ。木片を組み合わせて作られてた小屋のようなものが、雑木林を背にして黒々とした影となっている。

目的のバス停だと気付くのに、些かの時間を要した。日中、稀に通過するだけの道だ。少し環境が変わると、同じものがまるで違うものに見えたりする。

「今更、何も変わらないけどな」

一人呟きながら、不比等は小屋を覗き込む。

小屋は壁の一面だけを全て取り払い、街道側に口を広げていた。中には小屋自体と合一した木製のベンチがあり、座る事は出来る。典型的な田舎のバス停だった。

このバス停はもう機能していないはずだ、と不比等は思った。バス停が背を向けている雑木林の中に、古い山荘があったのである。そこを訪れる人のために作られたような停車場であった。山荘の閉館に伴い、バス停も放棄されたのだ。

屋根が雨を遮る。雷鳴をも伴い始めたそれは、しばらく止みそうにもなかった。

「まあ、たまにはこういうのもいいか」

ただ過ぎ去る驟雨をじつくり、他の物を一切断ち切って眺める機会などあまりない。花鳥風月を友とした覚えはないが、現代人がこういうものに憧憬を抱く理由は何となく理解できる。自然は非日常的な気配を含有しており、無意識にでも特別な何かを感じさせるのだ。

不比等はベンチに腰を下ろし、朧げな視界を巡らせた。

散歩のつもりで歩いていたら、ついつい遠くまで来てしまった。

不比等の衣服が吸い込んだ水滴が、ベンチの木を黒く染める。

子供の頃は、こうしてよく遊び回ったものだ。不比等にとっては

この田園風景が幼少の頃の記憶であった。

駄菓子屋で食料を買い込み、自転車を走らせてここまで来る。そしてしばらくは、自然の中を駆け回るのだ。その後には食べる駄菓子がたまたまなく美味しくて、たかだか百円の買い物で驚くほどに満たされていた。

あの頃から自分が遠退いたのか、あの頃が遠退いていったのか。束の間考えてしまう。

不比等はもう、二十二歳になっていた。

「先客がいるなんて。奇縁ですね、お兄さん」

突然の声に、不比等は弾けるように眼を向けた。

「びつくりさせました？ けどこっちもびつくりです、こんな夕立の中、使われてないバス停でくつろいでるお兄さんを見かけたんですから。最初は人じゃないのかと思いました」

そこには、小柄な少女がいた。座っている不比等と目線の位置が同じだった。

紺色のブリーツスカートに真っ白なシャツという清潔感のある格好が、どこことなく育ちの良さを垣間見せる。

「私も雨宿りなんです」

言いながら、少女は不比等から少し離れたところに腰を降ろした。不比等は適当な生返事をしただけだ。

本当に、妙なところで人と会う。周囲に民家は愚か、建築物の類いはほとんどない。あるとすれば、背後の雑木林の中にそびえ立つ古びた山荘だけなのだ。本来ならばこのような場所は田に関わりがある人間でもない限り訪れる事はほとんどない。

驟雨の終わりを待つ、刹那の奇縁であった。不比等を気にする風もなく、少女はベンチに深く腰掛けて雨を眺め始める。

「こんなところで何してたんだ？」

「それ、お兄さんが言える事じゃないです」

言いながら少女は微笑みを浮かべる。本当に、子供のような笑みだった。言葉や物腰がしつかりしているが容姿が幼いため、年齢が

いまいち読めない。

「俺は散歩の途中でこの通り、全身ずぶ濡れでな。今は休憩ってところだ」

ふと、不比等は違和感を抱いた。それがどこから発するものなのかは分からない。ただ漠然と、この少女は何かがおかしいと訴えかけてくる何かがある。

しかし、あまり不躰な視線を送るのも躊躇われる状況であった。人気のないこんな場所ならば、何が起きても警察を呼ぶ者はいないのだ。おかしな誤解は抱かれたくない。

「私も、お兄さんと似たようなものですかね。ちょっと気になる事があつて歩いてたらこの通りで」

「災難だな」

「そうでもないです、雨は嫌いじゃないです」

少女は屋根から少し手を出し、雨に白い肌を晒す。そこで、不比等は自分が抱いた違和感の正体に気付いた。

この少女は、傘も持たずに雨の中を歩いて来て、僅かな水滴も浴びていないのだ。

不比等が座っている場所は水を吸い込んだ木が変色しているが、少女の周囲は変わらずに木目が浮かび上がっているだけである。

肌の白さも、それに相反する漆黒のような短い髪も、どこか人間離れしているように感じられた。

もしかすると、人ではないのかもしれない。ふと、そんな気持ちが過る。

「幽霊を見たような顔、してます。私も、同じ気持ちですけど」

「俺が幽霊に見えるか？」

「ええ、とつても」

どこが、と少女は言わなかった。笑って見せただけである。ただその笑顔に害意はなかった。そして同時に、本物の笑顔でもないと思えた。

「私が本当は幽霊だって言ったら、信じます？」

「思いつく限りの質問を浴びせるかな。何しろ見た事がない」

いたずらっぽい笑みを浮かべながら問いかけてくる少女は、幼い容姿に不似合いな妖艶さを孕んでいる。案外、思っているよりも年長なのかもしれない。

「なるほど、じゃあ私は人間という事においておいたほうが良さそうですね」

少女は首もとにあるネックレスを手で弄びながら喋っていた。古びた鍵という、少し珍しいトップだ。

不比等は、胸ポケットに手をつ込んだ。煙草が入っているのだ。雨を浴びてしまったが、まだ大丈夫だろうか。

湿気っているかもしれないが、構わずに火を点す。案外、煙草の箱は雨に強いと不比等は思っていた。

煙がたゆたう。白煙はゆらゆらと実体を掴ませず、不比等の目の前から消えていく。雨音の静寂の中へと紛れているのだ。

「幽霊、信じてますか、お兄さん？」

「信じてる」

不比等の迷いない言葉に、少女は些か驚いたような表情を見せた。しかしすぐに微笑へと戻る。

「なぜ？」

少しかだけ語呂を漁った。思っている事を形にするのはなかなか難しい。

そうだな、と不比等は前置きしてから少女の眼を見た。

「この江甲だけを見ても、牛鬼の慣れ果てと言われる怪物岩、無限に広がる地下世界、なんて民間伝承がある。心霊スポットなんて数え上げれば終わりが見えないだろうな。江甲みたいな半端な都市でさえそんな有様だ。これはもう、いないはずがない。世界を見渡せばそんな話はごろごろ転がってる。いないと頭から否定するには、あまりに多すぎるほどにな」

正直な気持ちだった。いないと頭ごなしに否定するには、あまりに数が多すぎないか。それは不比等が抱く純粋な疑問であり、答え

でもあつた。火のない所に煙は立たない、という理論だ。

初対面の人間と妙な話題になつたものだ、と不比等は思った。それも、このような奇縁が成せる業なのかもしれない。

頭のおかしい奴と思われても仕方がないような事を不比等は言つたが、少女はそうは受け取らなかつたようだ。頷きながら、ただ訊いている。

「けど実際に見た事はない？」

「ないな。大抵は人から聞いた話で、それはF O Fだ」

ふふ、と少女が笑う。そして、ぴつと不比等を指差した。

「お兄さん、やっぱり幽霊ですね」

「そうか？」

「道端で出会つた女子高生に、自分の存在を認めてもらおうとしている可愛い幽霊です」

幽霊云々よりも、この少女が高校生であるという事の方に不比等は気持ちに向いた。確かに妙な色気は持っているが、それでもせいぜい中学生、運が悪ければ小学生呼ばわりされてもおかしくはない。若く見えるというより、幼く見える。それは垢抜けなさから来ているものではなく、生来の容姿なのだ。

会話が途切れた。しかしその沈黙は不比等にとっては不思議と心地よいもので、無理に破ろうとも思えない。少女もそれは同じよう、足を揺らしながら上機嫌そうに雨を見ていた。

雷鳴が奔る。曇天を切り裂く刃のようだが、雨が止む気配はない。残り三十分、と不比等は見切りをつけた。それでも雨が終わらなければ、濡れ鼠で帰る。

「……あつ」

少女が、何かを思い出したように声を上げた。

「用事が出来たみたいです。お兄さん、また縁があればどこかで見ましょう。あと、ここから少し離れたほうがいいかもしれません」

「離れる？」

「それじゃあ、またっ」



少女が小屋から駆け出していく。雨を気にしている風もない。不  
比等はそれを止めるでもなく、ただ見送った。

変な女だったな、などと不比等は反芻しながら煙を吐き出す。

一瞬、夕立時に相応しくない爽やかな風が、頬を撫でた気がした。

## 雷鳴と共に（後書き）

初めましての方は初めまして、そうでない方はいつもありがとうございます。

趣味で創作活動をしている上木です。

この『千なる彼方は六の鬼』は初めての現代ファンタジーとなります。尚、一度連載を始めたのですが致命的なミスに気づき一度削除しております。再連載という形ですね。

今回は不定期連載となりまして、全体としては三部構成のつもりです。

最後までお付き合いくださるととても嬉しいです。

次に後書きを書くのがいつかは分かりませんが、何もなければ一部終了時点となるだろうと思います。

それではまた、よろしく願います。

## 奇縁

起居するのは白川だが、不比等はよく明窓の歓楽街に顔を出していた。江甲市唯一の盛り場であり、夜が深くとも人は多い場所だ。午前中の方が閑散としているな、と不比等は思いながら喫茶店の一角で、煙草を銜えていた。人を待っているのだ。

周囲の客に眼をやると、その半分以上がカタギではないのが一目で分かる。目つきが普通の人間とは違う。ここはその手人間にとつては、馴染みの店の一つなのだ。

そういう店はいくつかあって、そこでは例え抗争中の組同士が鉢合わせてもハジク事は許されない。それが仕来りでありルールだった。

半分以上が裏社会の住人の中に、一見ただの青年でしかない不比等が混ざっているのは異様な光景なのかもしれない。不比等を知らない者は怪訝な表情でこちらを窺ったりしている。

不比等は極道ではなかったし、そうなる気もなかった。

ただ、死んだ父親が極道だった。その縁があり、今でも付き合いが続いているという形だ。父親の兄弟分がある組の若頭で、不比等自身が組長にも覚えが良かった。だから何かと眼をかけてくれるし心配もしてくれる。死んだ父親に対して唯一してやれる事、と若頭や組長が考えている事も不比等は知っていた。親代わりとも考えているかもしれない。だから、あまり無碍にも出来ないのだ。

今日、時間を指定してこの喫茶店に不比等呼び出したのは若頭の黒神だ。月に一度は顔を合わせて、金を受け取っている。父親の退職金を分割で息子に渡す、という形で生活費を支給してくれているのだ。本来なら母親が受け取るべきものだが、そちらももう死んでいる。不比等の両親は既に亡い。その他の親族は知らなかった。

不比等は、深く吸った煙を吐き出し、そのままソファーに身体を深く沈めた。

無為に生きている。時々、どこからともなくそういう思念が頭を擡げた。何をするわけでもなく、何をしたいわけでもなく、ただ金を受け取って生きている。

普通の二十二歳の男ならば、もっと別な事をして必死で生きていても良いはずなのだ。しかし不比等は働きもせず、金だけが転がり込んでくる日々を送っている。

そして、その金を何のために使うわけでもなく、最低限の飲み食いなどに使った後は残っていた。何のために残しているわけでもなく、使い道が見つからないだけなのだ。

そんな不比等を、周囲の人間は誰も責めようとしな。仕方がない事だと、揃いも揃って同情しているのだ。理不尽すぎる挫折を味わい、抱いた夢を打ち砕かれた。誰もがそう思っている。

陽光。窓の外だ。薄暗い喫茶店の中から、不比等はそれを見ていた。まるで自分の立場をそのまま映し出しているように思える。

自分は決して、この薄闇から出る事はない。そういう確信にも似た想いがあった。

「よう、不比等」

声に反応して、不比等は視線を店内へと戻した。煙草を揉み消しながら声の主を観察する。

紺色のスーツにネクタイという、筋者というよりはやり手のビジネスマンに見える男が不比等を見下ろして、無骨な笑顔を浮かべていた。不比等の父親の兄弟分であった、黒神だ。

黒神は不比等と向き合うように腰を降ろし、ウェイターに向かって丁寧な態度で「アイスコーヒー」と告げる。ヤクザは荒くれのイメージが強いが、実際は上に立つ人間ほど出来が良い。

注文の品が来るまでは、お互いに無言だった。不比等も顔を覚えている青年のウェイターがコーヒーを黒神に届けた時に、ようやく止まった時間が流れ出す。

「まずは、これだな」

黒神は懐から茶封筒を一つ取り出し、不比等に差し出す。不比等

はそれを頭を下げた受け取った。

口座への振込で済ませてもいいものだが、黒神が不比等の顔を見たいと言ひ張るのだ。些細な事だが、それで兄弟分であった父親との繋がりを感じているのかも知れない。

「最近どうだ？ 何か変わった事はねえか？」

「特に。黒神さんも、身体は大丈夫ですか」

黒神も、若かった頃に受けた傷が多くある。

「俺の身体は大丈夫だな。兄弟のおかげだ」

不比等の父親と黒神は五分の兄弟分として、まだ若衆の頃から共にあつたという。組内部の跡目争いで、不比等の父親は命を落としていた。おかげで若頭となつた黒神や、現組長が恩を感じているのだ。

全盛期の父を不比等は知らないが、徒手空拳での格闘は右に出る者がいかなかったと聞いた。殴るうがハジこつが決して倒れず、流れる血を自らの力と変えているような男だった、と。

父親を語る黒神はいつも誇らしげで、それは威を借っているといふより純粹な敬意から発せられるものだった。

「俺の心配をしてくれるのは嬉しいが、それよりも俺はお前が心配だぜ？」

「いきなり死んだりはしませんよ。残念な事に、健康ですし」

「そこまでは考えちゃいねえが、お前はふとした拍子に目の前から姿を消して、それ以来帰つて来なくなりそうで怖いんだ」

黒神が煙草を取り出したから、不比等は火を差し出した。このよゆうな事をする必要はないと黒神は言うが、立場の違いははっきりさせておくべきだと不比等は思っている。黒神の気持ちがどうであろうと、不比等が下である事は間違いないのだ。兄弟分であり命の恩人の件であろうとだ。黒神はその辺りが甘い。というより、不比等に對してのみ甘い。

「その若さで世を捨てるつもりか？ お前が何をしようが、俺が生きてるうちは後押ししてやる。けどな、今のままじゃ勿体ねえぞ」

「自分でも分かりませんね」

「仕事だってお前にその気があるならいくらでも紹介してやる。真つ当な仕事だ、俺達には関わりがない」

「気持ちだけで結構ですよ、黒神さん」

「そうは言ってもな。俺はお前に、日向に出て欲しいんだ。このままじゃ腐るばかりだぞ」

いつも繰り返している会話だった。

言っている事は、黒神が正しい。言葉は優しいし黒神自身も齒に布を着せているつもりはないだろう。しかし本質的には、ちゃんと働いて真つ当に生きる、という言葉に他ならない。

黒神は、唯一こうして不平等に「生きる」と言ってくれる人間だった。その優しさが、不平等にとっては有り難く、同時に重い。

「正直、こういう事は言いたくねえんだが……」

「なんですか？」

黒神はコーヒーに口をつけて、言葉を切った。

「お前、極道になったらどうだ？」

これは初めての言葉だった。

不比等は黙したまま、じつと黒神の眼を見つめる。裏社会に生きている人間独特の光と、鋭さを持った眼だ。

生半可な気持ちで言っているのではない。それはすぐに感じ取れた。

「お前も兄弟の血を継いで、やっぱりステゴロの達人だ。それに頭も良い。度胸と頭があれば、昇っていけるぜ」

後押しするように黒神が言う。しかし、不平等にその気はなかった。黙って首を横に振る。

「そうか。まあ、そうだろうなあ。いいよ、これは今回だけだ。二度と言わねえ、忘れてくれ」

「はい」

人の上に立ちたいと思った事はなかった。金が欲しいと思った事もない。情熱を持っていた頃は、ただ自分のやりたい事をやり続け

たいという欲求だけで動いていた気がする。

「お前ら親子の生き方はまあ、揃いも揃って刹那的だよ。見る側からすりゃ、本当に危うい。何でそんなところでって場面で薄氷を踏もうとする。自分の命なんてどうでもいいとばかりにな」

「父もそうでしたか」

「そうだった。それで、その薄氷を踏む時 いや、どんな時でも決して、誰かのために動いちゃいなかった、あいつは。自分がやりたいからやる。それだけだ。そのくせ義理には厚い。人情は皆無だが。ほんと、親子は似る」

そういえば昔、父と黒神が兄弟盃を交わしたきつかけは、父が黒神を助けたからだと聞いたような気がする。どういう経緯かは知らないが、命を救われたという話だ。

黒神は溜め息をつき、「この話は終わりだ」と言わんばかりに煙草を灰皿で揉み消した。そして、懐に手をつ突っ込む。投げ出すように、写真が一枚、テーブルの上に置かれた。

「これは？」

「誰だか分かるか」

早雲学園の制服を来た女子生徒と、その母と思しき女性が映っている写真だった。不比等はそれを手に取り、記憶を探る。

不比等も早雲学園の出身だが、既に二十二歳だ。高校生だった頃は最低でも五年前という事になる。不比等が卒業してから制服は一度変化を遂げているため、どう考えても同じ時間を学校では過ごしていない。母親らしき人物に至っては、この年齢の女性の知り合いが不比等にはいなかった。まず該当するものはない。

友達の友達などだろうか、と不比等は思った。そこでふと、昨日会った少女の顔が浮かぶ。しかしすぐに消えた。たまたま会話で FOF という言葉を出しただけなのだ。

「見覚えはありませんね。制服を着ている子はとても真面目そうですし、俺との接点はないでしょう。この女性に至ってはまず……」  
「そうだろうな」

苛立たしげに、黒神はまた新たな煙草を銜える。今度は不比等が火を差し出す前に自分で点けてしまった。

「問題があるのは、この娘の方だ。俺の娘なんだよ、姫乃って名前だ」

「黒神さんの？ へえ、可愛いですね」

「だろう。俺じゃなくて母親に似た」

写真をもう一度手に取り、よく観察する。確かに、黒神と似ている箇所は見つからなかった。

それに、黒神姫乃は写真で見える限り、一つとして非行の形跡が見当たらないのだ。至極真つ当な生き方をしているように、不比等の眼には映る。

「とても良い子に見えますが。お世辞なんかじゃなくて」

「ああ、良い子だ。俺を反面教師にしているし、それでいいと俺も思っている。こんな世界に入って来て欲しくない。だが、その娘が一週間前から行方が知れねえんだ」

「家出ですか？」

「分からない。今までそういう気配を見せた事は一度もないと嫁は言ってる。俺もそう思ってる。大体、一週間連絡無しに姿を消すなんて、高校生としちゃ普通じゃねえ」

確かにその通りだった。この様子だと恐らく学校にも行っていないのだろう。

失踪、と不比等は心の中で呟いた。同時に、大きな鼓動を感じる。理由は分からないが、自分の中に眠る何か雄叫びと共に目覚めつつあるような予兆が、全身を駆け巡った。

「黒神姫乃……」

不思議な衝動を抑えながら、不比等は黒神を見た。その表情に不安はないが、どこか悔悟のようなものが垣間見える気がした。

女子高生の家出ならばよく聞く話だが、真面目な女子生徒がそのようなツテを持っているとは考え難い。完全に姿を消すという事はどれだけ難しいか。ましてや姫乃の姓は黒神なのだ。深く潜るには、



その姓は邪魔である。

しかし同時に、誘拐や殺人などの事件とも、不平等は繋げる事を躊躇った。黒神なのだ。カタギで生きているが、極道の身内なのだ。直接、そうと知って手を出すのはまともな神経ではない。

極道は警察ではない。その戒律は厳しく、組長が黒だと言えば白いものも黒くなる。そして何より、警察には取れない厳しい処置を、極道は取る事が出来る。集団として、いくらでも手段を持っている。赤の他人ではなく若頭の娘。事と次第によつては死人が出る事態だった。

「もう、手は回してるんですか」

「可能な範囲でな。親父も必死になってくれてる」

黒神の言う親父とは組長の事である。ヤクザの組長と組員は、親と子なのだ。

「これは個人的な頼みだが」

「なんです？」

「お前にも、捜索に加わって欲しい。俺達と足並みを揃える必要はねえから、自由に探してくれ。見つけてくれりゃちゃんと労いはする」

報奨金のようなものを既に黒神は用意しているのかもしれない。言外に、最悪の事態も想定していると伝えられているような気がした。

面白そうだ、と口にこそ出さないが不平等は思った。ただの家出で偶然それが続いたのであれば金だけを手にすればいいし、そうでなければ何かしらの展開があるはずだ。その展開こそ、不平等が期待するものだった。

「お世話になりっぱなしですし、俺も可能な範囲で調べましょう。期限はありませんよね？」

「特に切つてない。それにしても、口だけでもそう言えるのが、お前が兄弟よりも利口な点だ。じゃあ、またな」

黒神は伝票を取り、振り返る事もなく支払いを済ませて店を出て

行った。こうして不比等には会いに来たが、本当に会いたいの娘の姫乃なのだろう。

写真が、テーブルの上に残されている。手がかりはこれだけだった。ただ不比等には、早雲学園出身という身分がある。学校に、卒業生として入るのは難しくなかった。黒神もそれを期待したのだろう。

しかし、失踪者として探す事は出来ない。姫乃の両親が学校に事実を告げて、警察に届けを出していたとしても、誰とも知れない男が嗅ぎ回っていては逆に不比等がお縄を貰いかねないのだ。

「これ吸ったら行くか……」

不比等は車のキーをテーブルに放り出し、煙草に火を点けた。涼しい店内を最後に味わっておきたいのである。

コインパーキングに停めた車は、今頃地獄と化しているだろう。

\*

不比等の車は、黒色の大型ワゴンである。四角いボディが特徴的な、ワゴンの中でもかなり大きな部類だ。

車は大きい方がいい、というのが不比等の信条であった。ただ単に積載量が多いからという理由なのだが、買ってから後悔はしていない。便利なものである。

不比等は車を停めて、ハンドルにもたれかかりながら前方へと視線をやっていた。早雲学園の校門である。

こうしていると、女子高生を狙う犯罪者に見えなくもない。車種も車種だ。いつもは停まっていけない車に、校門を出る生徒の一部も不審な眼を向けている。

あまり細かな事は気にしなかった。教師が呼ばれて出て来たら、適当な事を言つて誤摩化せばいいだけだ。

時代の移り変わりを感じる。不比等が通っていた頃とは制服が違ふのだ。男子はネクタイが変わったくらいだが、女子はスカートが紺色だったものから赤のチエックと緑のチエックの二種類に変わった。

校門から出て行く生徒を一人一人確認しながら、不比等は黒神姫乃の写真を胸ポケットから取り出した。

「まるで探偵だな」

自嘲気味に呟く。しかし、こういう何かしらのトラブルに関わっている時こそ、不比等は楽しいと思えた。

言ふなれば非日常。失踪も、誘拐も、殺人も、日本という法治国家に生きる者にとつては日常ではないし、あつてはならないのだ。

ほんの少し、不比等はその非日常に近い場所にいた。父親の存在が大きいが、不比等もまた、かつては素行の良くない学生であつた。刹那主義とも言うべき思想、生き方。時々の快楽を優先し、危険に身を晒してこそ生きていると思える。その衝動は、幼少の頃、田園や雑木林で棒切れを振り回していた時に感じた欲求と似ていた。そういう血だ。

父の言葉を思い出す。口癖のようなものだった。あまり家にいない父だったが、時折不比等を見かけてはその言葉を口にした。

黒神の不安は、不比等が父と同じような末路を辿る事なのだろう。今のままでは、いずれ近いうちに命を落とす。極道として、非日常に身を置いている者の直感が働いているのだろうか。

「死んだら死んだで、なあ」

校門から、野球部らしき集団が出てくる。ランニングにでも行くのだろうか。不比等は部活をやっていた事がないため、よく知らず知りたくもない。

坊主頭の一団の後ろに見覚えのある人影を見つけたのは、煙草に火を点けたのと同時だった。

赤色のチェックのスカートに白いシャツ。リボンもきつちりと身につけていて、楚々とした様子の少女。誰といんでもなく一人で、紺色のスクールバッグを抱えていた。

黒神姫乃の件で話を訊きたい人間ではない。しかし不比等は車を降りて、校門の方へと歩み寄っていた。野球部員達が視線を向けてくるが、それはどうでもいい。

少女も近づいてくる不比等に気づき、しばし眼をしばたかせた後に笑顔を浮かべ、駆け寄ってくる。

「本当に縁があるみたいですよ、幽霊のお兄さん」

「そうらしい。まさか早雲学園の生徒だったなんてな」

夕立の中、無人のバス停で居合わせた少女だった。頭頂部が不比等の胸の辺りにある。光を浴びて、真っ黒な髪に照り返していた。背は女として見てもかなり低い。

見上げるようにして、少女は不比等をまじまじと見ていた。

「お兄さん、今は幽霊じゃないです」

「白昼の往来だからな。そう見たくても見れないだろう」

「そういう意味じゃないですよ？」

少女は言いながらスクールバッグを漁り、古びた鍵がトップになっているネックレスを取り出した。学校の中でつけていては没収される危険があるから、忍ばせていたのだろう。

慣れた動作で首の後ろに手を回し、留め金を引っ掛けている。それをつけた時、少女の顔に少し安堵が浮かんだように、不比等には見えた。

「それで、何か学校に用が？ それとも私を待っていてくれたりしたんです？」

「どっちでもないな」

少女は笑みを浮かべながら言葉を紡ぐ。それが本物の笑顔かどうかは、相変わらず怪しいものだった。少なくとも不比等には、本物の笑顔には見えない。

「あんたを見かけたからつい出て来たが、本当は別の奴に用がある。

悪いな、止めちまって。行ってくれ」

不比等は手を振って車に戻ろうとした。別に用事があったわけではないのだ。しかし少女はそれを遮るように、くるりと回って不比等の前に立つ。

それを避けて不比等は無言で車の扉に手をかけたが、そうすると少女が不比等の手を掴んでいた。

「何だ」

冷たい手だった。夏の突き刺すような日差しを浴びている事が信じられなくなる。

「せつかくだから」

「悪いが、あんたにしてやれる事はないんだ。してもらう事もない。呼び止めておいて何だがな」

「まだ言い切つてないです」

少女が、不満げに頬を膨らませて見せる。ふざけてやったつもりだったのだろうが、その仕草がよく似合っていた。それほどに、この少女の容姿は幼い。しかし同時に、奇妙な妖艶さも持っている。

「私、江甲に来てまだ短いんです。案内してくれる人とか欲しくて」「学校の友達にでも言えよ。見ず知らずの男を頼るなぞ正気の沙汰じゃない」

「お友達が欲しいんです。人見知りです。きっかけがないとなかなか」

「きっかけは学校で探してくれ。俺はそこまで暇じゃないし、暇であつたとしてもあんたに割く時間はないんだ」

汗一つ流さず、少女は涼しげな表情で不比等に笑いかけてくる。

不意に、全てを見透かされているような気分に襲われた。笑顔の仮面の下で、何処までも冷静に不比等を観察している少女の姿が、見えたような気がした。

「……ああ、何だ」

不比等は溜め息をつき、助手席側に回って扉を開いた。

「とりあえず、座つてくれるか。涼しい場所にいたい」

「そうですね、それは私もです」

飛び乗るようにして、少女は不比等の車に乗り込む。スクールバッグを足下に置いたのを確認して扉を閉めて、不比等も運転席側から乗車した。

空調のおかげで車内は涼しい。頭上からの日光も屋根に遮られて、焼けるような熱気も消えていた。切り取られた空間に入ったせいで余計に、外が夏なのだと感じられる。

「クーラーというのは人類が生み出した名器です」

「まったくだ」

ずっと銜えていた煙草を、灰皿に突っ込む。そしてまた、校門から出てくる生徒の選別を再開した。もしかしたらもう帰ってしまっているかもしれないが、校門の出入りが下火になるまでは続ける。

「お兄さん、何か良い事ありました？」

それを知ってか知らずか、少女は昨日と同じように言葉をかけてくる。

「そう見えるか」

「見えますね。昨日とは違う眼をしていますよ。宝くじでも当たったのかと」

「宝くじが当たらずとも金には困ってないな」

少なからず生き生きしているとすれば、それはきつと黒神姫乃の失踪に関わっているからなのだろう。しかし他人から見ても分かるほど、自分は楽しんでるのだろうか。

他人の不幸を喜んでるわけではないはずだった。ただ単純に、非日常を呼び込もうとしている。その先にある生き甲斐に近い何かを探り当てようとしている。

少女は不比等と同じように校門を見ながら、合わせた膝の上に両手を置いていた。妙に行儀の良い女で、それが様になってもいる。

「贅沢な話です。お兄さんの歳でお金には困ってないなんて。何か悪い事でもしてるんです？」

「どつだろつな」

この少女は何を聞き出そうとしているのか。興味を示しているのは分かるが、それはどこに向けられた興味なのか。不平等にはそれが分からなかった。

「死人みたいな眼をしてると思ったら、次の日には期待に眼を輝かせてる。不思議な人です」

「俺にとつてはあんたが不思議でならない。こうして執拗に絡んでくる理由が分からないからな」

「奇縁が大好き、ただそれだけです。少なくとも、当たり前に出会って当たり前に分れる人よりは知りたくなります。違いますか？」

年齢にしては不相応な、自我を確立した少女だ。この年頃の子供は大抵、集団意識の中に埋没しながら己の個性を頑に主張する。やりたいようにやっているつもりで、結局は何一つとして出来ていない。

そういう虚仮威しや虚勢を、この少女からは欠片も感じなかった。唯一、仮面のような微笑みだけが、虚心ではないのだ。

「もしかしたらお兄さんは私の運命の人かもしれないし、誰かの仇かもしれない。はたまた生き別れの兄か、もしかして弟とか。実は私のお父さんは実の父ではなくて、本当はお兄さんが父だった？」

虚空を見ながら、少女は捲し立てるように言う。

「それで、本当のところは？」

「赤の他人です」

少女は楽しそうに笑い、鞆の中からペットボトルに入った紅茶を取り出した。温くなっていたらしく、少し口に含んで顔を顰めている。

この少女が変わり者なのは間違いない。それに昨日は気付かなかったが、言葉の節々に聞き慣れないイントネーションが入っているのを不平等は聞き取った。本当に微かなものだが、これは英語を公用語としていた人間によくある訛りだ。

日本育ちではないのかもしれない。となると、この江甲にはいつ来たのだろうか。英語の癖が抜け切っていないところを見ると、案

外最近の話なのか。

「……私の日本語、変です？」

不比等がじつと少女を見ていたからか、微笑のまま少女が問いかけてくる。

「何も間違っちゃいない。ただ訛りが残ってるって程度だよ。どこ  
の育ちだ？」

「丁寧語は、苦手です。私にとって日本語のお手本は母だったので、  
母の喋り方が一番得意かも。生まれは……そうですね、東南アジア  
と言って間違いはないです」

東南アジアと言っても広い。尤も、日本の生まれではないと知れ  
ただけで充分ではあるが。日本という島国が、その他か。日本人で  
ある不比等はどうしてもそういう捉え方をしてしまう。

少女の容姿は、かなり日本人に近い。髪や眼も黒々としていた。  
しかしその端正な容姿には、少なからず他の血を感じなくもなかつ  
た。それはアジアの血というよりは、欧米の血である。

「初めて、私に興味を持ちましたね、お兄さん」

そういえばそうだ、と不比等は思った。今までは少女の話聞き  
流しているだけな節があった。知りたいと思ひ質問を投げたのは、  
今が初めてだろう。

他人を知りたいと思った自分が、少しだけ苛立たしかった。その  
気持ちを押し込めて、不比等は煙草に火を点ける。

「けど、よく私の訛りが分かりましたね。自慢じゃないですけど、  
学校の友達はみんな私を生粋の日本人だと思ってます」

不比等には、少なくとも普通の高校生以上の英語に対する知識や  
経験はあった。外国人を相手にする事も多い仕事をやっていた頃が  
あったからだ。喋れなければ話にならなかった。雇っても貰えない。

少女の言葉には答えず、不比等はただ校門へと視線を注いだ。野  
球部の集団はとうに姿を消し、もうまばらに人が出て来ている程度  
だ。

「アテが外れたか……」



明日また来よう。そう思ったところで、明日は土曜日である事に気付いた。早雲学園は基本的に週休二日だ。

搜索は来週まで先延ばしにするしかないのだろうか。周囲の学生を捕まえて聞き込みをするのもありかもしれないが、可能な限り避けたい事態だ。余計な疑念は抱かれたくはない。

「人を探してたんです？」

少女は不比等がなぜここにいたのかを察したらしく、状況に相応しい質問を投げかけてくる。

「そうだ。群雲って知ってるか？ 群雲鏡って名前なんだが」

「ああそれなら、お友達です。転校してきたばかりの私に、声をかけてくれました」

不比等は自分の間抜けさに呆れた。この少女は早雲学園の生徒ではないか。何で最初に尋ねなかつたのかと、自分でも不思議になる。心のどこかに、この少女との奇縁の残滓があるのかもしれない。

それが、少女との関係を特別なものとして考えさせたのか。ただの先輩と後輩ではない、と。

「本当に、とことん縁があるみたいだな。連絡先は知ってるか？」

「私は知ってます……けど、鏡と知り合いなのに、お兄さんは連絡先は知らないんです？」

「鏡の兄貴と、俺は知り合いだったんだ。だから妹の鏡と直接連絡先を交換する必要性を感じてなかった」

それならばなぜ兄を通さないのかという顔を少女が作るが、不比等は無視して「連絡を取ってくれ」と言った。

携帯電話を取り出す少女を傍目に、不比等は車のアクセルを踏み込む。ついでなのだ、この少女は家まで送って行き、群雲鏡と落ち合えばいいだろう。

「お兄さん、名前は？」

「刑部不比等」

「不比等ですね」

鏡に説明するために、名を訊いたのだろう。なぜ呼び捨てなのか

束の間考えたが、すぐにどうでもよくなった。呼び方などどうでもいい。

少女は携帯電話を耳に当てながら、ネックレスの鍵を手で弄んでいる。

「私は乙矢響子です。覚えておいてください」

そういえば、今までお互いに名乗ってすらいなかったのだ。不比等にとっては奇妙な出会い方をした少女であり、乙矢にとっても同じようなものだったのだろう。

名を知った。契約を交わしたような気持ちに、不比等は束の間陥った。知らないままであれば、きっと三度目に会う事はなかっただろうと思える。

「日本人みたいな名前だな」

「私はとても気に入ってます」

ここで別れても、また必ずどこかで会う。奇妙な確信を抱きながら、不比等はハンドルを切った。

\*

群雲鏡は、色白で背の高い少女だった。不比等は幼い頃から鏡を知っており、その成長過程はよく覚えていた。鏡は不比等にとって、友人の妹だったのである。

今の鏡に、かつての面影はない。眼は光りと落ち着きを失い、深い隈が張り付いていた。顔色も白いというより青く、明らかに健康を害した者の容姿だった。

豹変ぶりに驚いていないと言えは嘘になる。不比等が最後に見た鏡は、人懐っこい少女だったのだ。

「久しぶりだな、鏡」

「……はい」

鏡は挙動不審で、不比等は少なからず驚きを隠せない。不比等の家から最寄りとなる喫茶店の一角は陰鬱な雰囲気醸している。その中でただ一人、乙矢響子だけが笑顔を浮かべて鏡の隣に座っていた。

家まで送っていかうとしたが何かと理由をつけて、乙矢は着いた来た。不比等が根負けした形である。

「びつくりしました。響子ちゃんと不比等さんが知り合いだったなんて」

鏡の声は消え入るように小さい。不比等は注意して言葉を一つ一つ拾い上げた。

「鏡、何か嫌な事でもあったのか？」

「いえ、大丈夫です。それで、私に用事って……？」

こういう答えが返ってくるのは分かっていて、突如として、数年ぶりに現れた兄の友人。そんな男に気軽に話せるような内容ならば、人の面貌はここまで変わらない。

同時に、不比等はまたもや強い衝動を感じていた。黒神姫乃の失踪を聞いた時と、同じだ。一瞬だが、鼓動が高鳴る。

「大丈夫なら、それでいいが」

自分の感じた何かを抑えるように、不比等は適当な言を発した。

乙矢に「期待に眼を輝かせている」と言われたばかりでもある。

「不比等？」

乙矢が催促してくる。なぜかこの少女は、言葉は丁寧だというのに名を呼ぶ時だけは呼び捨てだった。

乙矢はさっさと用件を聞きたいのだろう。鏡と合流する前から一緒にいた乙矢にも、なぜ鏡を探していたのかは語っていない。

「鏡、黒神姫乃を知っているか？ 確かお前を同じ二年生だったと思うが」

「……同じ、クラスです。最近休んでて会えてないけど」

不比等はテーブルの上に、黒神姫乃の父から受け取った写真を取り出した。それを見て、鏡は頷く。この人物で合っているという事だ。

「姫乃ちゃんに、何かあったんですか……?」

「失踪した。家族も居所を掴めていない状況だ。鏡は、姫乃の家庭事情を知ってるか?」

あまり言いふらすべき事ではないが、鏡に関しては口止めしておけば大丈夫だと不比等は判断していた。尤も、元来の性格が変わっていないければだが。

友人の失踪。良いニュースとは言えない。鏡はショックを受けるかもしれない。何があったか知らないが、今の鏡は憔悴している。

だが、不比等の予想に反して、鏡の表情はそれほど変わらなかった。それどころではない、という感じなのだ。

「お父さんがヤクザだって、聞きました。姫乃ちゃん、あんまり人に言うべきじゃないと思ってて、信頼できる人にしか言っていないそうですね……」

親が極道。それだけで、姫乃には余人に窺い知れない葛藤があったのだろう。不比等は少しだけ、それを理解できていると思っていた。不比等の親もまた、極道であったからだ。

いっそ親が極道だと言い回って威勢を張れるような性格ならば楽だろうが、写真を見る限りそういう側面は見えて来ない。真面目な女子高生でしかないのだ。

「姫乃はどんな人物だった? 鏡の主観でいい」

「真面目で、勤勉でした。とにかく頭の良い子で、私にもよく勉強を教えてくれましたし」

およそ写真の通りと言っている。人は見かけによらないと言うし確かにそういう事もあるが、多くの場合はやはり容姿にその人物の何かが出るものなのだ。黒神姫乃もその例には漏れていないらしい。「失踪する直前に、何か変わった様子は? 妙に覚えている事とか、

「何かないか」

「えっと、ですね……」

ただでさえ丸まっている背中を更に丸めて、鏡は自分の膝あたりへと視線を落とした。憂いを帯びた表情が陰り、本当に別人のように、不比等には思えた。

「うーん？」

考えている鏡を傍目に、乙矢が興味深げに黒神姫乃の写真を覗き込んでいた。手に取り、近づけたり遠ざけたりしながら何かを見ようとしているようだ。

「どうした、乙矢」

「響子って呼んでもらっていいです？」

「何か映ってるか」

乙矢の顔に不満が過る。

「……ぎゃおー」

爪を立ててはいるが、どこまでも無気力な、形だけの威嚇だった。無視した事に拗ねてみせたのだろうが、無駄に可愛い反応に不比等はどつっつこんだものか束の間考えた。

「ぎゃおーじゃない。それで、何か映ってるか」

「いいえ、何も。ただ見ていただけです」

笑いながら、乙矢はマジシャンがランプを消す時のように写真を撫でた。それに何の意味があるのかは分からないが、テーブルの上に戻ってきた写真を、不比等は懐に仕舞い込む。

「それで、鏡。何か思い出せたか？」

「最近、笛を初めて聞いた、すごい。いつもと違うと言えば、そのくらいでした。後はいつも通りで……何もありません」

「笛？」

乙矢が、反応を見せた。笑ったままだが、眼を見開いたのだ。少しだけ、素を晒したように思える。だが、何が興味を惹いたのかは分からない。

「江甲城公園で、笛を吹いてる人がいたんだって。ギターで弾き語

りしてる人とかはたくさんいるけど、笛はちよつと珍しいんだよ」  
鏡が、乙矢に分かるように説明を始める。

江甲城公園は、中甲区にある観光誘致のために作られた江甲城の麓にある広大な公園だ。城自体に歴史的価値はなく、従って公園にもそういう付加価値はない。ただ広い公園というだけだ。

江甲という土地の真中に、何の意味もないただの城を建てる意味が、不比等には分からなかった。

観光誘致が建前であったが、その広い公園を目当てにした家族連れが週末に訪れていたり、若者のダンスチームがいたり、鏡が言うように弾き語りをする者ばかりだ。観光スポットとしては不出来もいいところである。

「確かに何か見れる場所ではあるな。それも無料で」

「そうなんです、不比等？」

「知らないのか？」

「響子ちゃんは江甲に来てまだ短いです……」

鏡の言葉に付け足して、江甲に来たのは学校の夏休み明けに合わせて、と乙矢が言う。つまり、まだ一週間程度だという事だった。

それならば江甲城の事情を知らないのも無理はない。

「あそこは芸を披露したい奴にはいい。広くて土地は余りまくってる上に、公園と城しかないから多少の騒音は誰も気にしない」

言いながら、不比等は一週間という期間に引っかけりを覚えていた。黒神姫乃が失踪して一週間。乙矢響子が江甲に来て一週間。一致しているのだ。

何も乙矢が犯人だなどとは言うつもりはないし、思ってもいない。ただ何となく、心に残ったのだ。

こういう引っかけりは、案外どこかへと繋がっている。少なくとも、不比等はそう信じていた。違和感は偶発的な本能ではなく、積み重ねた経験から弾き出される必然なのだ。ただ全貌を見るまで、本人もそれに気付けない。

「不比等さんは、姫乃ちゃんを探して……？」

「ああ、姫乃の父親に頼まれた」

「そうですね……姫乃ちゃん、学校では単なる体調不良という扱  
いになってます。私も、黙ってたほうがいいですよ」

「そうだ、人には言うな。探そうとも思うな、おかしな事に首を突  
つ込む可能性もある。あと、紙とペンをくれ」

不思議そうな顔で、鏡が鞆から筆箱とメモ帳を取り出した。

メモ帳の空白のページに、無造作に選んだ黒のボールペンで不比  
等は自分の電話番号を書き込んだ。

「何かあったら、連絡をくれ。絶対に自分からは動かないでくれよ、  
あくまで偶然、耳にした物事を教えてくれればいい。学生の噂って  
のは、回るのが早いからな」

人の繋がりは無限である。どこから何が漏れてるか分かったもの  
ではなかった。こうして校内に網を一つ張っておくのも悪くはない。  
いくつか手を打っておき引つかかったところから探すのが妥当だ  
と、不比等は考えていた。駒から先に揃えてしまうのだ。状況に合  
わせて駒を作っている間は間に合うものも間に合わない。

「ありがとう。鏡、時間取らせて悪かったな」

もう聞ける事はない、と不比等は判断した。

帰ろうと腰を上げかかり、不比等は窓の外に眼を向けた。もう日  
が落ちてきているのだ。

「鏡、乗って帰るか？ 乙矢、お前も家の場所さえ言えば届けるが」

「いえ、私は近いので大丈夫。失礼します……」

鏡はそそくさと立ち上がり、そのままぺこりと頭を下げて、早足  
で喫茶店を出て行く。

何があったのだ。不比等は考えながら、伝票を手を取った。二年  
前は、あのような少女ではなかった。もつと闊達で、人が好きだっ  
たはずだ。それが今では屈託を抱え、人を恐れているように見える。

「最近、夢見が悪いつて言っていました、鏡」

「事情を知ってるのか？」

「いえ、知り合ったばかりの私は深く聞いてないです。鏡は黒神

姫乃ほど深刻だとは思えませんが、人の面貌をあそこまで変える悪夢。相当なものです」

ぱんぱんと、音を立てて乙矢がテーブルを叩く。座れ、と言外に示しているのだ。

仕方なく、不比等は乙矢と向き合うように腰を下ろした。満足げに笑顔を浮かべる乙矢は携帯電話を取り出し、何を言うでもなくボタンを押し始める。

次の瞬間、不比等の携帯電話が振動した。

「不用心です。こうして盗み見られて、個人情報漏れるかもしれないですよ？」

「目敏い奴だな……」

鏡のメモ帳に連絡先を書いた一瞬で、番号を記憶していたのだろう。

「まあ、鏡の悩みは数日中に解決すると思います。大丈夫」

「何だ、やっぱり詳しく聞いているのか」

「いえ、女の勘です」

笑顔に全てを隠す。それが乙矢のやり方らしかった。真意がまったく読み取れず、不比等はただ聞き流した。

時々、乙矢は不思議な事を言う。不比等が幽霊に見えると言ったり、バス停から離れると言ったりだ。日本育ちではない故の思考かとも不比等は考えたが、そういうわけでもなさそうだった。単なる性格なのかもしれない。

「それにしても、どうにも分かりません。不比等は、鏡が心配です？ それともどうでもいい？」

乙矢が、思いついたように話題を変えた。

「気に掛けてはいるけど、何かしようとは思ってない。強いて言うなら、待ってるように見えます。鏡が持ってきてくれるかもしれない、何かを」

「あいつが何を持ってくるんだ」

「それは私では何とも言えません。けど、不比等はそんな感じに



見えます。姫乃の一件も、鏡の抱えてる問題も、自分のための何かを見つける道具です」

「他人のトラブルを求めると、性格は悪くないつもりだ」

言いながら、否定は出来ない、と不平等は思った。

鏡を心配する心がないわけではなかった。蒼白な肌も、落ち着かない眼も、尋常ではない何かを抱えている者のそれなのだ。

一方で、鏡に具体的な「救済」を施さなかった自分がいる。何かあったのかと聞いただけで、食い下がりはしなかった。気遣う言葉も投げなかった。

心のどこかで、今の鏡に回復されては困るという思念が脈打っている。

間違いなく、自分は待っているのだ。その実感は日々強くなる。

無気力に生きながら、漠然として姿も捉えられない何かを、ただ待ち焦がれている。

黒神姫乃の一件でもそれを感じていた。そして同じ可能性を、群雲鏡にも感じている。

ほとんど衝動と言ってもいい、非日常に憧憬を抱く心。

「最初から思ってたけど、良い人じゃないです、不平等は」

「真つ当で良い人なら、働きもせずただ金だけ転がり込んでくるような生活はしてない。望んでもそんなツテがない」

雄飛、とでも言えばいいのか。

乙矢の言葉によって、姿の見えなかった自分の衝動が少しだけ形を持ち始めていた。

大きく人生を変える一手だ。それは社会的に大成するなどというものではなく、不平等の望む人生を歩めるという意味である。

自分の望む人生とは。不平等にはそれが分からない。非日常を求める欲求も、刹那的な思考も、終着点が見えないのだ。

「俺は、何を待ってるんだらうな」

呟いていた。乙矢は相変わらず笑いながら、嬉しそうに頷く。自分の言葉が認められたと思っただらう。

「不比等みたいな人は、時々見ます。ただ大半は、自分が大器晩成だと信じて疑わない愚か者です。所詮は外的要因を求める無能」

「世界を変えたいなら自分が変われ、だな」

「そうです。ただ稀に、本当に向こう側から誘いがないと入れない世界もあるんです。自分だけじゃどうにもならない、そういう世界」

自分は、鍵を持っているのだろうか。固く閉ざされた扉を開く鍵を。不比等は乙矢の胸元を見ながら、そんな事を考えた。ネックレスのトップが、古びた鍵なのだ。

「また、おかしな話になっちゃいましたね。どうにも、不比等といるとその手の言葉が出ます」

「そういえば、最初に会った時は幽霊がどうのって話だったか」

「です。不比等はほんと、変な人です」

「お互い様だ」

笑った。初めて、乙矢に向けてまともな笑顔を見せたかもしれない。

少しだけ、乙矢が驚いたような顔をしていた。乙矢が笑っていない所は二度目だな、と不比等は思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4184y/>

---

千なる彼方が六の鬼

2011年11月20日18時58分発行